

「白い襟の夫人」 1920年（大正9） 油彩（90.9×72.7）

「黒いキモノ」

中川紀元 明治25—昭和47（1892-1972）



2月11日の紀元節に生まれ、本名を紀元次という。諏訪中学から東京美術学校彫刻科に入った。退学して本郷洋画・太平洋画会等の研究所に学び、石井柏亭・正宗得三郎の指導を受けた。大正8年から10年にかけてフランスに留学、アンリ・マチスに師事した。この間、大正4年に第2回二科展に初入選。以後連続出品し、大正10年「アラベスク」など滞欧作10数点を出品して二科賞をうけ、12年には会員となった。新鋭にふさわしい31歳の時であった。マチスの野獣派（フォーヴ）の新風をじかにうけて、大胆な色彩を奔放に駆使する中川画風は特に若い画家達の共感をよんだ。

昭和21年、第二紀会を同志と創立、しかも信州飯田で結成した。中川二期会にしようと言ったら、正宗が紀元の紀がいいとあって、この名称となったという。

郷里の朝日村（現辰野町）に疎開し高校で絵を教えたりして31年まで田舎に暮らした。晩年までよく描いている伊那の南画的な風景は、この郷土の10余年の間に、伊那の印象がしっかりと脳裏に写された結果であろう。

代表作としては大正9年の「立てる女」があり、17回二紀展の「少女」は雅味と清浄さを感じさせてくれる。また第5回県展作に「雲涌く夏の山」がある。39年芸術院恩賜賞をうけた。

留学中は仏文学の岸田国士と交遊し、若いときから文才があり、「ピカソと立体派」、「世路のシミ」などの著書がある。「絵を見る目」の中で、絵の見方について「自然を見るのと同じように見なさい」と言っている。

#### 《作品》

黒いキモノ 画面に「一九二〇巴里 中川紀元 NaKaGaWa」と書いてある。豊かな髪のパリジェンヌを描き、東洋からの小さな紀元が筆力をもって挑んだ気概が十分みてとれる。バックの帯褐色の赤と黒のドレスの見事な対比をみせている。フォーヴは色の炸裂と評されたが、本作はこれに近づきつつある作とみてよいだろう。相応しく元女子高で所蔵する。

「伊那谷ゆかりの作家展（2004年10月19日～11月3日）」（文 矢島太郎）